



実施者	
《教 員》	千葉工業大学 未来変革科学部 経営デザイン科学科 教授 加藤 和彦 千葉工業大学 創造工学部 デザイン科学科 准教授 大嶋 辰夫 千葉工業大学 情報変革科学部 高度応用情報科学科 助教 中川 泰宏
《学 生》	千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 加藤研究室 千葉工業大学 創造工学部 デザイン科学科 大嶋研究室 千葉工業大学 情報科学部 情報ネットワーク学科 中川研究室 文化系サークル7 団体（航空工学研究会、精密ロボット工学研究会、総合工学研究会、ソフトメディア研究会、電子工学研究会、天文研究部、模型部）
《協働パートナー》	【行政】南房総市役所 市民生活部 市民課 市民協働グループ、南房総市役所 教育委員会 子ども教育課

1. 背景・目的

インターネットの利用が広がり様々な情報が瞬時にどこでも手に入る時代となったが、体を使って実際に触れて学ぶ機会は今の時代でも重要である。そのため、本プロジェクトは、南房総市を中心とした安房地域の子どもたちへ触れて学ぶ機会を提供し、科学・工学分野に対する興味を広げることがを目的に、2018 年度から人材育成支援活動の一環として科学技術体験を行っている。

2. 活動内容

このプロジェクトの活動は 2018 年にスタートしており、2018 ～ 2019 年度は、リノベーションした公共施設を利活用する「空き公共施設利活用プロジェクト」の枠組み内で子ども向け科学講座を実施している。この時の活動が評価されたため、2020 年度からは「人材育成支援プロジェクト」へと名称を変更し、定期的に科学講座を開き、現在に至っている。

COVID-19 の影響があった 2020 ～ 2021 年度のオンライン開講を除き、これらの活動はその効果から対面での開催を基本としており、市内小中高生を対象として取り組みから、企業や地域団体の人材育成支援に至るまで活動の枠を広げている。

中でも「わくわく科学技術体験」は来場者が例年 100 名を超えるイベントとなっている。このイベントは小中高生に対して科学技術への関心を大きく高める効果があることから、本年度も「わくわく科学技術体験 2025」の名前で 12 月 7 日（日）に三芳農村環境改善センターで開催した。募集のために配布したチラシを 図-1 に示す。本年度は、参加団体が昨年の 9 団体から 10 団体へと拡大し、体験できるコンテンツも「ロボット操縦体験」、「ドローン操縦体験」、「電子工作体験」、「自作ゲーム体験」、「プラネタリウム体験」、「ものづくり体験」、「科学遊戯体験」と多岐にわたっている。本年

度は南房総市市民協働グループと千葉工業大学のスタッフ 44 名が運営に携わり、南房総市市民を中心に 128 名が来場した。昨年度の 131 名にはわずかに届かなかったが、例年規模の開催となる盛況ぶりだった。本年度は千葉工業大学の文化系サークル 7 団体（航空工学研究会、精密ロボット工学研究会、総合工学研究会、ソフトメディア研究会、電子工学研究会、天文研究部、模型部）と研究室 3 団体（加藤研究室、大嶋研究室、中川研究室）によって運営されており、子どもたちの体験を学生がサポートすることで、双方にとって豊かな経験となった。2024 年度からは 1 階と 2 階の二つの大会場を利用したイベントへと拡大しており、本年度は 1 階で 4 団体、2 階で 6 団体による体験型展示を行った。この時の 2 階の展示の様子を 図-2、図-3 に、1 階の様子を 図-4、図-5 に示す。

3. 成果と課題

本年度は参加団体が 10 団体へと拡大し、昨年と同じ 1 階・2 階の二会場構成からエリアを拡大することで、より多様な体験機会を提供することができた。来場者数は 128 名と昨年度と同規模を維持し、体験ブースでは子どもたちが主体的に取り組む様子が多く見られた。アンケートや当日の反応からも満足度は高く、地域における恒例行事としての定着が進んでいるといえる。また、市担当課との継続的な連携により、企画・広報・運営面で円滑な協働体制を構築できたことも大きな成果である。

教育面では、学生が企画立案から準備、当日の運営までを主体的に担い、子どもたちへの説明や安全管理を通して実践的なコミュニケーション力やマネジメント力を養う機会となった。専門知識を分かりやすく伝える経験は学生自身の大きな成長にもつながっている。一方で、体験後アンケートをオンライン形式で実施したものの回答率が伸び悩むという課題が明らかとなった。



図-1 わくわく科学技術体験 2025 の募集チラシ



図-2 2 階展示会場の様子（ロボット操縦体験）



図-3 2 階展示会場の様子（電子工作体験）



図-4 1 階展示会場の様子（ものづくり体験）

域学協働の工夫！

- ★南房総市の人材育成ニーズと千葉工業大学シーズのマッチング
- ★事業を後押しする行政との相互連携
- ★オンライン会議を利用した行政との緊密な連携

4. 今後の展開

本年度は参加者の生の声を集めるため、体験後のアンケートを QR コードによるオンライン形式で用意する新しい試みを行った。回答結果から有益な意見が得られたものの、回答率自体は思わしくなかった。その原因として、小学生同伴の親子が多かったため、後で回答をゆっくり行う余裕がなかったためとも考えられる。スマートフォンに慣れた世代のため、利便性を考えての試みとしたが、実際には現場で負担なく回答してもらう仕組みが必要であることがわかったので、今後は紙とオンラインの併用やその場で回答できる簡易形式の導入などの工夫により、参加者の意見が反映できるようにしたい。また、現在は小学生を中心とした広報にとどまっているため、今後はより広い世代に参加してもらえるよう広報戦略の見直しも必要と考える。

*表彰・マスコミ掲載など

・“集まれ 未来のエンジニア！ 南房総市で「科学技術体験」に親子 130 人”，房日新聞，p4, 2025 年 12 月 31 日

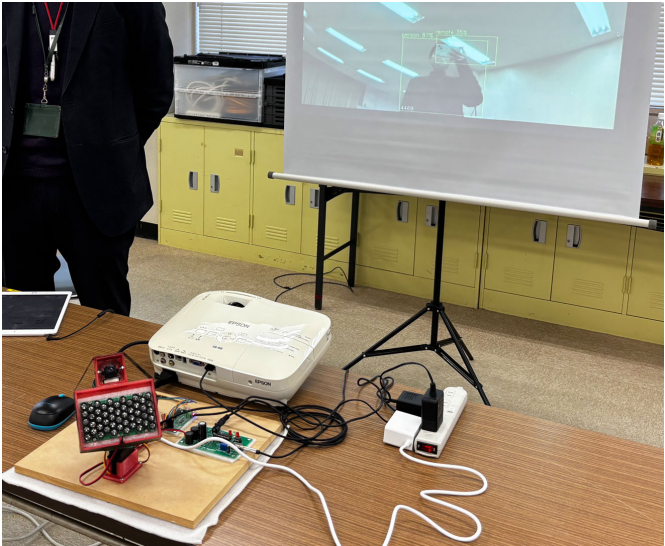


図-5 1 階展示会場の様子（科学遊戯体験）